

栗駒山

-1628m-

岩手県一関市・秋田県東成瀬村

JR東北線一ノ関駅から岩手県交通バス須川温泉行き終点下車

JR奥羽線横手駅または十文字駅から羽後交通バス須川高原行き終点下車

2000年10月14日

- 2130 新潟駅前
- 2200 新日本海フェリーターミナル
- 2350 新潟港発
- 600 秋田港着
- 635 秋田港発(バス¥390)
- 700 秋田駅着
- 810 JR秋田発(JR¥1450)
- 940 JR十文字着
- 944 十文字駅前発(バス¥1540)
- 1110 須川高原着
- 1235 栗駒山頂
- 1255 山頂発
- 1430 須川温泉着
- 1445 須川温泉発(バス¥1450)
- 1620 一ノ関駅前着
- 1635 一ノ関駅前発(バス¥650)
- 1730 真城着

昨年に引き続き新日本海フェリー 秋田 奥羽山脈越え 岩手というコースで紅葉を楽しもうと思った。もともと栗駒山へ行こうと思った最初の動機は、JRのパンフレット 1で紹介されていたからで、これには「手軽に高山の雰囲気堪能できます」とある。また栗駒山は実家(水沢市)からもよく見える。南西方向にそびえる三角形の頂点にいつかは登ってみたいと思っていた。

今年の4月にJR横手駅にて横手周辺のバス時刻表を入手し、何気なく眺めていたら横手から須川高原までの直通バスがあることを知った。この時は今年栗駒山にでも行こうかと漠然と思った程度である。9月に入ってから交通機関の時刻を調べたり栗駒山関連のホームページをいくつか参考にしながら具体的なスケジュールを立てた。栗駒山は小さい頃温泉

周辺を歩いた程度である。その先の山頂へ向かう登山道の状況把握にホームページは役に立った。交通機関の方は、十文字駅での列車からバスへの乗り継ぎ時間に余裕がなく心配である。十文字のバス停が駅から離れた所にあると間に合わないかも知れないがこれは行ってみないとわからない。これより早発の列車に乗ればよいのだが寝台列車、または秋田港からタクシーとなり出費が大きい。何が何でも栗駒山に、と言う事もないのでバスに乗り遅れたら十文字周辺の散策をしながら次回の登山計画の立案をしようと思った。

当日は会社の飲み会が新潟駅前であり当然山行きの荷物持参で出席。会終了後駅前のバスターミナルから山の下行き最終バスに乗り込む。フェリーは2等寝台を事前に予約していたが当日の10時までには手続きに来るようにと言われていたのでバスから下車した後フェリー乗り場まで小走りで行く。1階のカウンター、2階の待合室とも大勢の人がいてびっくりした。昨年乗船したときは誰一人もいなく閑散としていたのとは大違いである。乗船後ゆっくりと入浴しその後新潟港の夜景の写真を撮る。酔っていた上にスローシャッターのため手振れ写真を量



写真1 フェリーから新潟の夜景

産してしまった。

翌日は5時に目が覚めた。まだ外は薄暗かったが船室の窓からは秋田港が見えた。着替えた後デッキに出て秋田港のシンボルタワーであるセリオンやその背景にある市街地を眺める。秋田港は雄物川の河口にできた港だが秋田名産の秋田杉と思われる広大な貯木場がある。フェリーターミナルはセリオンの真向かいにある。「パン」と音がし船尾にいる係員が固定用のロープを陸に向けて発射した。

連絡バスで秋田駅に向かう。秋田駅は中央コンコースが延長されていた。まだこの先は工事中だが駅のコンコースを中心に市街地まで高架橋で直結する計画のようである。駅のと真ん中を突き破るようにしてコンコースが延長されたので「JR秋田駅」の看板も隠れてしまっている。秋田新幹線開業に合わせて駅舎がモダンな建築物に改装されたこともあって一見ただけではこれが駅とは思えない。駅のホームで朝食(サンドイッチ)とする。ホームのそば屋が開店していたのを見て今日のような肌寒い朝はうとんでも食べて暖まった方が良かったなと少し後悔した。奥羽線上り普通列車に乗車。すぐに市街地を抜け出て田園風景が広がった。

十文字で下車。バスの連絡に余裕がないので小走りで改札を出る。「駅前」というバス停の名前であっても実際はかなり離れている場合もあるので駅から町の中心部まで走る覚悟をしていた。駅舎を出ると駅前広場があるがバスターミナルはない。バス停は駅前広場を出て左(南)に道路を進んですぐの所にあった。まあ、ほとんど駅前と言ってよい。この文章を書きながら思ったことだがバス停の場所は

十文字駅の改札口で尋ねることもできたのだが……。焦っていると気がつかないものである。

5分前で「栗駒ライナー」のヘッドマークを掲げた急行バスがやってきた。乗客は10人ぐらい。このバスは沿線の観光案内のテーブルが車内に流れ、見所では徐行・停車する。おかげでこの地方の地理や歴史をわずかではあるが知ることができた。途中通過する増田町にマンガ図書館があることは知っていたが、「釣りキチ三平」の作者矢口高雄氏の故郷であることを知り驚いた。なぜならその一週間前に「釣りキチ三平」を読んだからである。全くの偶然にびっくりしながら車窓の風景を眺めると道路と並行して成瀬川の清流が流れている。矢口氏もこの川で釣りの腕を磨いたのだろうかなどと想像した。しだいにバスは山中に入る。途中の展望台でトイレ休憩。運転手が「景色がいいところだから皆さん降りてください。」と言うので乗客は半ば強制的に降ろされた感じであった。展望台に上り、直下の渓谷を見ると既に紅葉が始まっている。今年初めて見た紅葉だった。

高原の雰囲気が濃厚になり所々に池塘が点在している。山頂まで行かなくても車窓の風景で満足できる。終点の栗駒山荘前で下車する。下車するときにバスの乗車証明書を渡された。この証明書を書面に記載されている施設に持参すると入浴料金が半額になるとのことである。土産物屋などで賑わっている道を進み秋田・岩手県境を越え須川温泉の登山口まで約10分。もうもうと立ちこめる温泉の湯気の中を上り始める。小さい頃はもっと強烈な硫黄のにおいがした筈だが今日はそれほど感じない。前方に団体がいてなかなか先に進まない。ゆっくり写真でも撮



写真2 秋田港ターミナル



写真3 登山口付近

ろうかと思って振り返ると眼下の紅葉が素晴らしかった。

しばらく灌木地帯をくぐり抜ける。単調な道のりで少々飽きてきた頃、急に目の前の展望が開け広い湿原(名残ヶ原)の中に入る。名残ヶ原の真ん中を木道が横断している。ここは夏に来ると気持ち良さそうだ。名残ヶ原の周囲の岩からは湯気が立ち上っていて温泉があることがわかっておもしろい。横断すると道が左右に分岐しているがその場所に地図入りの案内板が立っていた。どちらに進んでも山頂に至るようだ。左が昭和湖らしいのでそちらに進む。再び灌木の中の上り道となる。道は全体的にぬかるんでいて滑りやすい。朝方に雨が降ったようだ。小沢を渡ったあと少し尾根へ上ると左手が地獄谷と呼ばれる硫黄の流れる谷となる。周囲は植物が育たず枯れ草とごろごろとした岩があるのみ。この殺伐とした雰囲気が地獄を連想させるのだろう。この付近から時々晴れ間がのぞき紅葉がいっそう鮮やかに映し出された。この地獄谷に沿ってしばらく上っていくと平坦な地形になり昭和湖のほとりになる。この幻想的な景色を写真に収めようとしてファインダーを覗いたらピントを合わせてもぼんやりと霧がかかったようにしか見えない。おかしいなぁと思って調べていると視度調整用の接眼レンズを紛失したことに気づく。地獄谷で写真を撮った後、変な格好でカメラを肩にぶら下げていたのが原因だろう。またやってしまったと思ったが500円の物だしカメラが壊れたわけではないので落胆した気分をとりなおして登り始める事にした。

その後は再び灌木の中の単調な上りが続く。天狗平から視界が開けるかと期待したがガスのため眺望はゼロ。真っ白な景色の中、もくもくと登山道をトレースするのみであった。山頂に到着。大勢の人がいる。しかし依然として視界は無い。あきらめて昼食のおにぎりを食べる。しばらくするとイワカガミ平方面の景色がガスの一瞬の切れ間から見え隠れするようになった。やはり山頂から見た紅葉が一番美しい。下山途中も天狗平までの稜線上からの景色は格別であった。南には絨毯を敷き詰めたような紅葉、その奥に世界谷地(らしき)湖沼群、北は須川温泉とその背後にそびえる焼石連峰、西になだらかなピークの秣岳など。

このコースは比較的簡単に登れるのでザックをもたない手ぶらの人も多い。また紅葉シーズンだけあって大判カメラを担いで登ってくる人も大勢いた。渋滞はホームページからの情報で当初から予想していたのでさほど気にならなかった。

帰りは一関行き岩手県交通バスに乗車する。こ



写真4 名残ヶ原



写真5 地獄谷



写真6 昭和湖

ちらの方は満席だった。道幅が狭く対面通行できない箇所ではバスの運転手が待て・行けと相手のドライバーに的確な指示を出す。しかしなかなかその通りにならない場合も多く一部の乗客は相手のドライバーに腹を立てる場面もあった。真湯からやっと平野部に出てバスも快調に飛ばす。今日の山越えも無事終了。一関駅前でバスを乗換し自宅に向かった。
<完>

参考文献

1 - 列車で行く北東北トレッキング1999夏(JR東日本盛岡支社発行)



写真8 山頂からの展望(南面)



写真7 山頂からの展望(南面)



写真9 焼石岳遠望